

平成14年度
健全育成委員会
懇談・研究会レポート

「より多くの親が参加する活動を目指して」
父親たちの会「上杉チャンネット」に学ぶ

宮城県PTA連合会健全育成委員会

会	長	菅原 敏元	(栗原)	栗駒町立栗駒中学校
担当副会	長	吉田 弘美	(宮城)	七ヶ浜町立向洋中学校
担当副会	長	高橋 邦明	(名取)	名取市立増田中学校
委 員 長		千葉 恵	(栗原)	栗駒町立文字小学校
副 委 員 長		星 守夫	(角田)	角田市立桜小学校
副 委 員 長		高橋 克也	(玉造)	岩出山町立池月小学校
委 員 長		砂金 良宏	(亘理)	亘理町立山下第二小学校
委 員 長		望月 俊一	(古川)	古川市立古川中学校
委 員 長		三浦 啓治	(加美)	宮崎町立宮崎中学校
委 員 長		佐藤 俊郎	(栗原)	一迫町立一迫中学校
委 員 長		安倍 秀一	(石巻)	石巻市立中里小学校

はじめに

宮城県PTA連合会健全育成委員会委員長 千葉 恵

宮城県PTA連合会健全育成委員会は、2年計画の「より多くの親が参加する活動を目指して」をメインテーマに、今年2年目の活動をしています。

昨年度は、子供たちが今どのような問題を抱えているのかを把握するための懇談会、研究会を、2回開催しました。「不登校、引きこもりの問題」「少年非行、犯罪の実態と学校における生徒指導」の2つのテーマのもとに、現場で取り組んでおられる方々をお呼びしてお話を聞きました。

現在の青少年が抱える問題の原因を理解し、解決策を探ってみると、親子も含めた人間同士の心のかかわり合いが大切であるということが見えてきます。PTA活動は子供の考えにも目を向け、子供の理解者であることが大切であるということを学びました。

こういった問題と理解を踏まえて、今年度は子供たちを上手に取りこんで活動している団体、積極的に集まって親同士の理解を深めている団体、特に、忙しい仕事に負けず積極的に活動している父親たちの団体といった視点から懇談先を選び、学習させてもらおうということになりました。そうして選び出されたのが、子供たちの健全育成に大きな役割を果たしている父親たちの組織「上杉チャンネット」さんです。

懇談を通して子供たちとのかかわり方、地域社会とのかかわり方、学校とのかかわり方といったものを学ぼうというのが大きな目的です。以下は、懇談、研究会を通して、私たち委員が学び取ったこと、感じたことをまとめたレポートです。なお、昨年同様、この懇談、研究会の報告レポートは宮城県PTA連合会加入のすべての単位PTAの会長さんに配布することにしました。会員各位への情報の発信、懇談会の資料等にお役立てください。

また、東北PTA連合会母親委員会が昨年実施した「家族の在り方に関するアンケート」の調査結果を、宮城県内の数値のみ編集し直したのも同封いたしましたので、あわせて御利用ください。

平成14年健全育成委員会懇談会

開催日 2002年11月15日(金) 午後7:00~9:00

開催場所 仙台市KKRホテル

出席者 上杉チャンネット(5名)、仙台市PTA連絡協議会より(2名)
県PTA連合会より(11名)

上杉チャンネットからは、代表世話人を含む主要な世話人5名、県P連からは菅原会長、玉田事務局長にも参加をいただいた。また、仙台市PTA協議会からも参加をいただき、18名での懇談となった。

県P連会長、健全育成委員会委員長、上杉チャンネット代表世話人のあいさつに続いて、望月委員の進行で、自己紹介から懇談が開始された。

懇談は、向かい合った席で、そちらこちらで少人数の話し合いの輪ができるといった、フリートーク形式で、時間いっぱい9時まで盛り上がった。以下は、上杉チャンネットの紹介と、懇談のようすをまとめたものである。

上杉チャンネットとは？

・最初は

2000年、6年生を持つ男親が担任の先生と一献交わそうと懇親会を企画した。

上杉学区で何か緊急事態が起きた時に、男親は何ができるのだろう。PTAのほとんどの役員が

母親。そんな中でおやじたちの考えを気軽に話せる場がほしかった。そうしたところ、担任ばかりでなく、校長先生をはじめ多くの男性教師にお集まりいただき、親しく懇談することができた。それを機に懇親会を重ね、2000年8月、初めて『Gakkouへ泊まろう』の企画が生まれた。その当時は「上杉 父さんネット」という呼び名であった。

・上杉チャンネットの名前は

2001年3月正式に会として発足、地域の父ちゃん、母ちゃん、じいちゃん、ばあちゃんのチャンであり、多くの方がかわれるよう、また、昔、父親の呼称としてももちいられていた「チャン」を引用。粋にとらわれない集まりを目的としている。

・主催事業は

「Gakkouへ泊まろう」がメイン行事である。そのほか講話、お花見、ビール工場見学、青葉祭り山ぼこパレード参加、子供たちとの忘年会開催、会報の発行などが主催事業としてある。スタッフ会議は、KKRホテル 粋（居酒屋）で行われている。

・メンバーは

子供たちにかかわろうとする、家庭、学校そして地域の方々、特にお父さん方が参加。役員は、互選により選出した世話人からなり、うち一人を代表世話人として会を運営する。代表世話人は原則として留任しない。会運営の詳細は世話人会でそのつど決定する。

・メイン行事「Gakkouへ泊まろう」活動内容

代表的な活動として、『Gakkouへ泊まろう』がある。一回目は、2000年8月19、20日に行われた。学校での総合学習導入に向けて、地域と学校、子供たち、そして保護者との融和を促進し、特に若い世代の父親の、地域及び学校教育への参加を促進し、あわせて災害時の模擬演習を通して集団生活を体験することで、社会生活を学び、また被災地での生活の一端を理解させることを目的に実施。

二回目は、2001年8月18、19日。宮城県と各地との風習、文化の違いを探る。

ことしは三回目にあたり、2002年8月17、18日に行われ、七夕で使用した竹を再活用して親子で竹細工をつくり、親と子のきずなを深め、地域との交流を進める。毎年、子供たちに何をさせるか、しっかりした目的を決めて活動を行っている。対象者は上杉学区小学生、4・5・6年生、および保護者若干名。それに実行委員、協力委員の先生、サプリーダーとして中学生が参加する。中学生をサプリーダーとしてスタッフに加えている点に注目してほしい。

参加費は、1000円以内で行っている。しかし、この行事をこんな参加費で行っているのかと、感想が出るほど内容は盛りだくさんであり、パラエティーにとんでいる。まさにお父さんパワーであり、社会的人脈をフルに活用して、多方面から協力や理解を得ての活動である。

・これからのこと

- ・創設の志を忘れずに、会の継続と発展を！ やらされるのではなく自らやってみよう。
- ・世代交代を図りながら幹事を皆で交代しよう！ 新しい発想を生み育てよう。
- ・財源は活動が生み出すもの！ 財源確保に悩まずに。（会費はすべて実費制）

懇談会まとめ

1、設立の契機となったのは何か

- ・母親まかせだった子育てに、父親も参加しよう。
- ・好きなときに好きなだけ、気ままに参加できる会をつくろう。
- ・「G a k k o uに泊まろう」を企画したことが、会発足の契機。

2、転機が訪れたとき

・好きな人だけで活動する会もいいが、メンバーが固定すると、新しい人が入りにくくなる。それを防ぐために、正式な会として、入会というわかりやすい形を提示することで、入りやすくした。

3、子供たち、地域、学校との具体的なコミュニケーションについて

(Q) 地方へ行くほど父親の参加は多い。それは自営業者が多かったからだと思う。今は必ずしもそうではなくなっているが、それでもやはり父親の参加は多いと思う。上杉地区ではその点はどうか。

(A)

・意外かもしれないが、上杉でも父親の参加は多い。しかし、行事に参加するだけで、終わったらばらばら、お互いにかかわるという関係は余りなかった。また、父親たちが事業主体であるということもまれで、いってみれば、参加して帰るだけのお客さんだった。それがもったいないと感じた。子供との行事を離れてもコミュニケーションが取れる父親同士のネットワークが欲しかった。

・来る気がある人は仕事をサボってでも来る。また、持続するためには、サボってでも行きたいと思うような活動を続けていけるかどうかということ。自分たちが楽しめるということが大切。

・上杉は、自治会や行政等、各種団体が大変多く、ほかでもいろいろな行事が行われている。そんな中で、チャンネットの魅力はしがらみがないことだと思う。必ず行わなければならない行事を抱えているわけではないという点を生かし、行事を行うこと自体を目的とするような集まりではない、ほかの団体がしり込みしてしまうような企画でも、積極的に取り組むことができる。これは、逆にいえば、自分たちの役割ではないと思われることは、きっぱりと断るということでもある。その特長を生かし、維持しながら、ほかの団体ともネットワークを築いていきたい。

・子供たちにとっても、自分たちにとっても、泊まる活動ということの意義が大きい。泊まりで活動することで、親たちはより深く知り合える。また、子供たち一人一人のプロフィールが、どこの子供かということまで含めてわかる。そのことによって生まれる信頼関係や、親しい関係には、子供たちの非行を抑制するというとても大きな効果を生む。実際に、注意もしやすく、また、しかるときにも本気でしかれる。注意された子供の側も、知っている大人の注意であればわりと素直に聞き入れる。

・泊まりの行事のときには、中学生にはサプリーダーとして実行委員側の立場で参加してもらおう。このことは、中学生にとってとてもよい効果を生む。参加した子供たちが楽しければ、少しずつ参加者はふえていく。

・強制しない、義務ではないということ。何名が参加しなければならないといった制約もない。参加したい人だけ、という基本姿勢が、運営にも、参加にも一貫してある。

4、学校に泊まるという行事について

(Q) 学校に泊まる行事というのは親だけの力では成しえないことだが、PTAのように先生も参加している団体ではない立場で、その行事を成功させたことの要因は。

(A)

・学校を開放する行事には、校長先生の意向が大きく左右する。この行事の場合、校長先生に話をした時点から、その趣旨に賛同してくれ、いくらでも使ってくれという協力を得ることができた。まずこれが、この行事を実行できた最大のポイントだ。

・話をしてみても初めて、先生も十人十色であると実感した。それを実感することで、先生との付き合い方に面白みが出てくる。親もまた十人十色。いろいろな人の内面を知ること、付き合いは深く楽しくなっていくし、こちらの話をじっくりと聞いてもらうことができるようになる。「学校は先生たちのものではない、子供たちのものであり、子供たちが主役だ」という思いが、親と先生とに共通のものであるということも、親しくなることで知ることができたと思う。

5、行政とのかかわりは

・今のところ特にない。世話人会では、行政からの補助を受けるべきだという意見も出るが、補助を受けることによって生まれる義務によって、活動が制約を受けることを懸念する声が多く、今まで踏み切らずに来た。

・活動に義務が加わることで、形を維持することに力が注がれ、具体的な活動ができなくなることに懸念される。

・行政からの補助を受けるべきだという意見の背景には、活動資金のすべてを会員の自前でまかなっているということがある。会のパンフレットは1部450円かかっているが、どこからも補助金のない状態では、会員の懇親会のたびに会費から少しずつストックしてためている。

・仙台市からの助成の申し出も受けたことがあるが、今のところ上記のような事情で賛否両論である。

6、学校5日制の完全実施に伴う行事の持ち方について

・学校5日制の完全実施に伴って、会で何ができるのかはずいぶんと考えたが、そのための特別な行事の企画、展開は見送った。社会の状況が学校5日制の完全実施に対応できるような体制にはないということが大きなネックである。学校5日制の完全実施は社会全体が土曜日に休むような状況下で実施されるのが本当は望ましいと思う。

・とにかく、活動自体に少しでも無理があったのでは長続きしない。PTAは子供が卒業したら終わる活動だ。いってみれば、多少無理な活動でも、期限付きなのである。しかし、チャンネルは期限がない。子供が小学校、中学校を卒業しても、チャンネルはずっとチャンネルなのである。だから、自分たちが楽しめる活動であることが基本であり、大切にしているのだ。

委員の感想

・上杉チャンネルの基本的な姿勢は、子供たちと楽しい時間を過ごしたいという思いから、自分たちも楽しむこと、またフリーハンドの運営を心がけるといふものです。会の自主性と自由度を大事にしていると感じました。そこでPTAとしてこれができないかお聞きしたところ、「PTAでは会員すべてが対象となり、できることが限られる。むしろPTAという組織運営にしばられない方がいい」とのこと。現在上杉チャンネルは、PTAとは役割やなすべきことをわけ合っていて、良好な相互関係を保っているそうです。子供たちの健全育成を目指す環境は、PTAだけでできることではありません。上杉チャンネルの取り組みが、環境づくりに厚みを持たせていることは確かです。しかし、PTA会員でもあるお父さんたちがPTA活動の主軸として参画してくれば、PTAそのものがもっとフレキシブルに変わりえるのではないかと感じました。

・上杉チャンネルは、活動を通して親子、地域、学校とのかかわり、親同士のかかわりを持つとする団体である。趣旨に賛同した人たちが集まり、会を運営、活動している。私は郡部で暮らしているが、隣近所の付き合いがなくなってきたと感じている。同じように、都市部でも何かを感じているのだと思う。主となっている活動「Gakkoに泊まろう」が、スタートであり原点であるという。学校にみんなで泊まる。地域の知らないおじさんだった友達のお父さんや学校の先生の素顔が見えてくる。地域のおじさんの顔がわかると、普段町で会ってもあいさつができるようになる。団体生活がわかる。さまざまな利点が、学校に泊まることで生まれている。また、あまりPTA活動に積極的ではなかった父親の参加が多くなったということから、関心の高さがうかがえる活動だ。PTAではやらないような活動を中心に行うことで、PTA活動を影から支えるようなスタンスをとっているのも特徴的だと感じた。

・活動資金の調達には、懇親会の際に会員から徴収するのだそうだ。パンフレット代などをお父さんたちのこづかいでまかなっていると聞き、驚いた。参加費は実費負担であるが、ほかの経費は、会員の仕事や人脈を使い、互いに協力し合って物資を調達することで極力削減しているのだそうだ。確かに、経費ばかりかけても行事がうまくいくとは限らない。お金をかけずに行事を組んでいるよい例であり、また、子供の要求していることを的確にとらえた行事の組み方をしている点はとても参考になると感じた。子供たちの反応がよければ、お父さんたちもやっている実感

がわくだろう。自分の専門分野や経験を子供たちに教える。繰り返すうちにのめりこんでいくだろうことは容易に想像できる。本当に、よい意味で、親 子供 地域 学校 親と、うまく回転している行事である。このような行事の組み方は、今後大いに参考にしたいと思う。

・活動自体が地域に根差したものである。学校週五日制導入もあり、家庭、地域での子供たちの過ごし方に疑問を持ったお父さんたちが立ち上がり、自分たちが子供のころに体験したおもしろいことを学校に泊まって子供たちに伝えよう。そのためにはどうしたらよいか。地域、学校、親が真剣に考えた結果生まれたのが今の活動だと思う。上杉は転勤族が多く、住民の出入りが激しい地域であると聞いた。そのことは、北は北海道から南は沖縄まで、バラエティーに富んだ遊びや習慣を、子供たちに教えられるという魅力でもあると思う。また、企画に当たっても、出身地自慢のお父さんたちが集まって「おら方はこうだ」、「僕のほうは違う」などと、いい意味での意見交換をし、それをうまくまとめて実行している。私たちの地域では、ほとんどの住民が昔からいる人々であり、何かをしても出てくるのは同じ顔ぶれである。PTA、地区役員、消防団など、一人が何役も兼ねており、かわり映えのしない行事を淡々とこなしているだけに過ぎないような活動が現状である。上杉チャネルの話を聞いていると新鮮に思うことも多く、大変参考になった懇談である。

・子供たちの健全育成に、積極的に大きな役割を果たしている父親たちの団体「上杉チャネル」と懇談するということが、子供たちとのかかわり方、地域の人たちとのかかわり方、そして学校とのかかわり方などを学びたく、楽しみに参加した。学校を舞台に、子供たち、父親、先生、そして地域の方々との一泊の共同生活を実施し、いろいろなことを体験学習しながら信頼関係をつくり上げていることに、すばらしさがあると思う。父親たちの交流という点にも注目した。校庭にテントを張って、父親や先生、地域の方々と酒を飲みながらの交流を行っている。これは、参加する父親たちが楽しく活動できる内容を考えてのことだということ。確かに、そういったコミュニケーションも、参加者が楽しめるのならば効果的かもしれない。

・子育てを母親まかせにすることの多い時代に、上杉チャネルさんの存在には驚きました。懇談を通して、父親が主体になって積極的に活動している内容を知るよい機会になりました。また、「父親のパワーのすごさ」というか、言葉では表現しきれない熱いものに接し、親と子が共に学んでいくことの大切さや、常識だけの活動にとらわれない態勢を間近に感じました。親同士の連携がいかに重要であるかを再認識させられました。まずは、この瞬間から親としてできることを心がけ一歩を踏み出そうと思います。

・PTAという団体は巨大である。組織が巨大になるほどその機構は複雑にならざるを得ない。活動についてくる制約も大きくなってゆくものだと思う。上杉チャネルの活動は、そういった制約にしばられることのない自由さが最大の魅力なのだと感じた。しかし、根底にある「子供たちのために」という思いは全く同じである。私たちPTAは、今、確かに形骸化してきている活動を見直し、「子供たちのために」何をなすべきか、何が困難であるのか、何が必要なのかといったことを再考すべきだろう。その上で、お互いに足りない部分を補い合えばよいのだと思う。PTAでは実行困難なことでも、上杉チャネルのような形をとれば可能なことは多いと思う。逆に、PTAの名前と巨大なネットワーク、力がなければ実行できないこともたくさんあるだろう。大切なことは、だれがやるかよりも何をやるか、だれができるか、なのだと感じた。

・上杉チャネルに限らず、多様な活動形態を持つ多くの団体が、等しく「子供たちの未来のために」という思いで活動しているのだと思う。いろいろな問題にぶつかっている団体も多いと思う。うまくいった活動のノウハウは積極的に共有すべきだろう。PTAは、その大きなネットワークでより多くの団体とコンタクトを取り、情報を多元的に発信してゆくことができるだろう。これからのPTAの活動の中で、そういったコミュニケーターとしての役割が重要になってくるであろうと、今回の懇談を通して強く感じた。